

王龍溪における佛教の理解

牧 田 諦 亮

蒙古族政權を倒して漢民族による天下の統一を實現した明の太祖は、科擧制を復活し、國家教學の基本として朱子學によつて思想的統一を計らんとした。しかしながらかゝる意圖のもとに着々復興された朱子學の流行は官學としての形式化を招來し、こゝに新に王陽明（一四七二—一五二九）による主觀的・行動的・實踐的な「致良知」につぎる新しい哲學が提唱され、明代後期の思想界を風靡するの狀を呈するにいたつたのである。王陽明の佛教に對する批評は、學三變す（辭章—佛老—儒）と言われた彼の經歷からも知られる如く、其の本質にふれるところが多かつた。佛教は相に著せずと稱しながら、其の實甚だしく相に執着してゐるではないか。「佛は父子の累をおそれて父子のわくを拔出し、君臣の累をおそれて君臣のわくから拔出し、夫婦の累をおそれて夫婦のわくから拔出した。すべて父子・君臣・夫婦の相に執着して逃避をはかつたものにすぎない。」（傳習錄下）とし佛者の慈悲心を以て肉を食せずとするが如きも、一方に於ては穀類を食せざるを得ない人間生活の必然性と、愛の差等を認めて此の問題を解決する徹底した陽明學の理論追及も、その後繼者によつて、佛教批判乃至は佛教の教説を以て已れの説を扶けつゝ、佛教を排撃する立場を放擲して、かえつて佛教に親近せんとする傾向を生じた。王畿（龍溪）・王艮等がその主流をなしたと

いわれる。王艮（心齋先生一四八三—一五四一）は泰州の人で「良本狂士。往々鴛師説上之。持論益高遠。出入於二氏」（明史卷二八三）と稱せられ、また黃宗義によつて「陽明先生之學有泰州・龍溪而風行天下。亦因泰州・龍溪而漸失其傳。泰州・龍溪時時不滿其師說。益啓瞿曇之秘。而歸之師。蓋躋陽明而爲禪」（明儒學案卷三十二）と評せられてゐる。かく王艮の泰州學派と並び稱される王龍溪（一四九八—一五八三）も亦、師説を承けつゝ、猶師説に駕してこれにくわうるところがあつた。かの同門の錢德洪との四句教法についての話柄は有名な事實であるが、彼が「德洪徹悟不如畿、畿持循不如德洪。然畿竟入於禪。而德洪猶不失儒者矩矱云。」（明史卷二八三 錢德洪傳）とされ、また、「善談說能動人。所至聽者雲集。每講難以禪機。亦不自諱也。」（同王畿傳）と傳せられてゐることによつても、王龍溪が陽明の立場を超えて、禪に泥んだといわれる所以である。かゝる明史等の批評にもかゝらず、はたして王龍溪が儒家の立場を忘れて、禪機に傾倒したかについては若干の疑問なきを得ない。老子に虚といえは儒にも寂あり、世の儒者はその根本をおしはからずして、いたずらに釋・老二氏を異端とするのは普遍的な議論ではないとして、儒佛道三教の一體をのべた「三教堂記」の如き説（王龍溪先生全集卷十七）はしばらく措くとして、彼が佛教に深い

理解と同情を示したことは疑をいれない。たとえ、楚侗子が老・佛の虚無と、儒家の學との同異をたずねた時に、「吾が儒の本宗を明白にしてのち釋・老二氏の説をもその同異を辨別できるのであるとし、徒らに名象に泥みとらわれる」ことを戒め（全集卷四、東遊會語）、また「先師（王陽明）は吾が儒と佛學は不同であり、たゞ毫髪の間も相混すべからずとし、貴方（吾臺の陸子）もまた、儒佛の學は同じからず。相混すべからずという、言同じきに似ているが、然も先師は儒に重點があり、貴下は佛に重點をおいている。もともと儒佛は太虚の如きものであり、太虚の中、重を説き、輕を説くことはない」とし、「道固並行不相悖也」と述べていることも注目すべきである（全集卷六、答五臺陸子問）。また、修道の方法として彼がとりあげた知行合一の説の如きも、「吾人終日應酬不離見在。千緒萬端皆此一念。爲之主宰。念歸於一。精神自不至流散。如馬之有轡銜。……一念明定。便是緝熙之學。一念者無念也。即念而離念也。故君子之學。以無念爲宗。」（全集卷十五、趨庭設語付應斌兒）とし、またかくしてこそ生死の輪廻を脱し得べしとして、「人之有生生死輪廻。念與識爲之崇也。念有往來。念者二心之用。或之善。或之惡。往來不常。便是輪廻種子。識有分別。識者發智之神。倏而起。倏而滅。起滅不停。便是生死根因。此是古今之通理。亦便是見在之實事。儒者以爲異端之學。諱而不言。亦見其惑也。至人無心。則念息。自無輪廻。識變爲知。至人無知。則識空自無生死。爲凡夫言。謂之有可也。爲至人言。謂之無可也。」（全集卷十五、新安斗山書院會語）としてゐることからも、王龍溪の佛教—禪—に對する知識の深さを知る。また良知を説明して、習氣人欲を破除したのちに良知が致されるのでなく、良知そのものがそれを破除する利刀であ

王龍溪における佛教の理解（牧 田）

り（全集卷十七、尙賢品德説）、これを氣といふ、盡性といふ、立命といふ。良知そのものが天であり、さればこそ知の一字は紫妙の門である（全集卷十七、易測授張叔學。知之一字紫妙之門は宗密の禪源諸詮集都序に見える著名な句である）。黃宗義が、師説をこえ、まろ／＼瞿曇の秘を啓くとするのは故なしとしない。

しかしながら、先師王陽明以來の、儒教は經世の學であり、佛老は出世の學であるとする根本的な立場を超越したものではない。道佛のおかした誤りは、「以て天下國家を治むべからず」と批判したところであつて、儒家の聖も、道家の空、佛教の寂もその始めは毫釐の差ではあつても、實は千里のひらきの根本となるものである。

佛家には父母の恩に報い、下は妻子の養を樂うといつており、未だかつて人倫の理を遺棄してはいない。たゞ父子の縁は重く、夫婦の情愛が深いから、佛家は其のきづなにひかれて、繫縛から脱し得ないことをおそれて、下根の衆生のために説法して戒を立てたのであつていわば權の法であり、上根の衆生には世間法にわたることなく、一切平等で淫怒癡をそのまゝ戒定慧とする、いわゆる眞實の法を説いたのであるかとする間に對して、佛家が妻子の養を願いつゝも、ついに淫欲を斷ずるを以て教門とせざるを得なかつたのは、佛家が情に心をうばわれ、相に執着したからである。現實よりの逃避にもかゝらず、ついに淫欲を斷つて、佛教の種類が斷絶したならば何人に法を傳え、衆生を度する所以するのであるうか。まことに賢知者の過というべきであらうとしてゐる（龍溪會語卷五）のは、やはり儒家の根本態度に立脚した佛教批判と言ひうるのではないであらうか。同様のことは、佛氏が普度衆生不惜身命を説くのに、儒者は専ら自私自利を説くはこれまた扶教護法の言とすべきだ

ろうかとの疑問に對して、佛家は無縁の慈を行じて悉く衆生を度して同じく寂滅に歸すというのは、我々の世界（現成界）とは全く交渉のないところで、吾が儒の物と體和暢合するのとは立場を異にしていることを答えているのも記憶されてよい（會語卷五）。佛家が世間の學であり、佛家が出世間の學であるとするのは古くからの批評であるが、ことにこのことが強調されるのは、明中期以後、經世實用の學が思想界を風靡するにいたつた社會構成を知ることによつて理解される。當代における儒佛通貫の説は思想界の大勢となつてゐるし、僧家の中にも、儒學に深い造詣を示し論語解・中庸直指（徳清）、四書藕益解・周易禪解（智旭）等の著書すら行われており、また、「爲僧而不兼外學。懶而愚。非博也。難乎其高。爲儒而不究內典。庸而僻。非通也。烏乎其大。株守而弗移。自畫而無進。空腹高心拘墟東教。終貽笑於大方也已矣」（釋氏稽古略續集序）とされ、儒佛道三教の混融した中に、一の安心立命を得んとした時代の動向を無視することはできない。當時の中國人によつて理解され、受容された佛教が、すでに隋唐時代におけるような、はつきりとした教判に立脚しているものでなく、それらを超越して、或は全く無視して、中國人の「創作」した新しい形をもつた宗教が、佛教の名のもとに行われていたことも顧みなければならぬ。それは外國の教である佛教の前進であり、本國の教である儒教の退歩を意味するものである。かゝる風潮の中に、佛教をさしおいては儒教の教説も語れないというような情勢がকাশ出されてきていることは注目に値しよう。朱子が儒釋の相違點を論じて、釋氏の唯心論を排しているが、陸象山は釋氏に近づき、その門下の楊簡は靜坐の工夫を重んずる「狂禪」に墮した。胡敬齋の説は釋氏具性の説と評せら

れ、王陽明も「以知覺爲性」即ち心を以て理となすことは「佛氏之所謂性。覺而已矣」と羅整庵によつて批判されているほどである。王龍溪が、師説を超えて禪に沒したと稱されるのも所以なしといふかの如くであるが、如上の佛教に對する儒教の根本的立場を固守しているのを見ると、なお、明代儒家の佛教觀乃至佛教受容に一つの極限のあることを忘れることはできない。

陽明の學というものは佛教の説をかりてできているものでしようかとの問に答えた王龍溪の答は此の一つの限界を示しているものであろう。「非也。非惟吾儒不借禪家之路。禪家亦不借儒家之路。昔香嚴童子問滄山西來之意。儒山曰。我說是我的。不干汝事。終不加答。」とて、馮山の話柄を拉したつて、陽明の學はそれ自體有るものであり、吾が儒は禪家の道を借らず、のみならず「今日良知之說。人孰不聞。却順自悟。始爲自得。自得者。得自本心。非得之言也。」（全集卷七、南遊會紀）と斷じてゐるのは、世上禪に泥んで儒を忘れたと評される王龍溪に、儒の本源にたつ一面のことを物語るものであり、これは「門外の寶」であり、遂に「自己の家珍」とはならない。人心は本來虛寂であり、原來、聖に入るの眞路頭であり、儒家において之は儒となり、禪家之を得るとき禪となるものであつて、もとより他を借りてこれを己れのものとするのではない（全集卷七、南遊會紀）のであり、儒家より排撃さるべき佛老の中に、儒たるべきものを見、儒家の中にかえつて異端を見ることが反省をなしつゝも（全集卷十七、三教堂記）、王龍溪が己れの佛教理解に明白な一線を劃していることは、明史に「畿兗入於禪」と評するの過言であることを示すものであろう。